子どもの＜集める活動＞に着目した造形表現の指導法に関する研究

吉岡 千尋[1]・隅 敦[2]・川口 奈々子[3]・竹内 晋平[4]

[1] 神戸松蔭女子学院大学教育学部

[2] 富山大学教育学部共同教員養成課程

[3] 奈良教育大学非常勤講師

[4] 奈良教育大学美術教育講座

Author's E-mail Address: yoshioka-c@shoin.ac.jp

Research on Teaching Methods of Formative and Expressive Activities with a Focus on Children's "Collecting Activities"

YOSHIOKA Chihiro[1], SUMI Atsushi[2], KAWAGUCHI Nanako[3], TAKEUCHI Shimpei[4]

[1] Faculty of Education, Kobe Shoin Women's University

[2] Joint Institute of Teacher Education, School of Education, University of Toyama

[3] Part-time Lecturer, Nara University of Education

[4] Department of Fine Arts Education, Nara University of Education

Abstract

本研究では、保育者による子どもの未分化な表現を見取る視点を支援するためのコードである＜造形的行動＞のうち、「集める」に着目する。子どもが目的を持って集めているように見受けられる姿や、集めることに終始しているように見受けられる姿等、「集める」にはいくつかの類型が存在すると推察される。そこで本研究では、子どもの＜集める活動＞の構造および思考過程の検討を行い、その検討に基づいて造形表現活動の質的改善を図るための保育指導を提案することを目的とした。第 2 章においては、＜集める活動＞が含まれる子どもの記録動画をもとにしたエピソードを抽出し、エピソードから＜集める活動＞とその前後における子どもの思考傾向を明らかにするためのフローチャート作成を試みた。そして第 3 章では、＜集める活動＞における子どもの思考過程に基づいた保育指導

Journal of Kobe Shoin Women's University, No. 5（March 2024）, *113–122*.
神戸松蔭女子学院大学研究紀要 No. 5（2024 年 3 月）, *113–122*.

を提案した。

In this study, we focus on the “collecting” activities of the codes of “formative activities” which are intended to support the caregivers’ efforts to understand the children’s undifferentiated expressions. Various types of "collecting" are assumed to exist, which include those in which the children seem to collect with a purpose and those in which they seem to be engaged exclusively in collecting. Therefore, this study examined the structure of and thought processes during children’s “collecting activities.” Based on this examination, the study offered childcare guidance to improve the quality of the formative and expressive activities. In Chapter 2, we extracted several episodes from children’s video recordings that included the “collecting activities,” with an attempt to create a flowchart to clarify the children’s thought processes before and after the “collecting activities.” In Chapter 3, we proposed a childcare guideline based on the children’s thought processes during the “collecting activities.”

キーワード：造形的行動、フローチャート、保育指導
Key Words: Formative activities, Flowchart, Childcare guideline

1. はじめに

子どもはいつ、どのように作り（描き）はじめるのだろうか。また、その作りたい（描きたい）といった思いはどのように生成されるのだろうか。本研究はこれらの問題意識が端緒となっている。

これまで筆者らが報告した研究（吉岡・川口・隅・竹内、2022）において、保育者による子どもの未分化な表現を見取る視点を支援するためのコードとして＜造形的行動＞を提案したが、本研究はそれらの中から「集める」に着目し、子どもの思考過程を解明するとともに、その解明に基づいた保育指導を提案するものである。

先述の報告済みの研究における＜造形的行動＞とは、領域「表現」に関する専門的事項に関連する内容について、『幼稚園教育要領解説』、『保育所保育指針解説』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』に含まれる記述から造形に伴う行動（「触れる」「持つ」等の 13 のコード）を抽出したものである。同研究においては、特性の異なる自然環境（「森」「川」「海」）の中で活動する子どもの記録動画を対象として＜造形的行動＞を視点とした質的分析を行い、自然物の構成が異なることから子どもの＜造形的行動＞の傾向に特徴が現れることを確認した。このうち特に「森」では、＜造形的行動＞のうち「見る」「持つ」に次いで「集める」が頻出する傾向が認められた。このような「集める」の中には、子どもが目的を持って集めているように見受けられる姿や、集めることに終始しているように見受けられる姿等があったため、「集める」にはいくつかの類型が存在していると推察された。このことから本研究においては子どもの＜集める活動＞の構造および思考過程について検討し、その視点に基づいて造形表現活動の質的改善を図るための保育指導を提案することを目的とする。

2. 研究方法

具体的な研究方法としては、次の 3 点である。第 1 に造形活動における子どもの思考過程等について扱った先行研究の検討を行うことである。第 2 に自然環境における子どもの活動を記録した動画から＜集める活動＞についてのエピソードを抽出することである。第 3 に、エピソード分析から子どもの＜集める活動＞の構造と思考過程をフローチャート作成によって可視化することを試みる。そして、フローチャートから得られた子どもの＜集める活動＞の傾向に基づき、自然素材を扱った造形表現活動の保育指導案を提案する。

なお、自然環境における子どもの活動を記録・分析するに当たっては、下記の点についての配慮を行った（研究開始前に、奈良教育大学研究倫理委員会の審査（受付番号 5 － 6）を受審し、データ収集等の手続きについての承認を得ている）。

・自然環境における行動をビデオ収録する際、対象児の身体的・心理的負担とならないようにするため、回数・1 回あたりの時間等については保護者との協議を通して慎重に決定する（具体的には、ビデオ収録 1 回あたりの時間は 10 分程度以内とし、それを 1 日に 3 回程度までを基準として協議によって決定する）。

・研究論文として発表する際には個人が特定されないよう、氏名等の情報を記述しないようにするとともに、画像の掲載は行わない。

・研究成果が掲載された論文発表等が完了した後は、速やかに電子データを完全に消去し、紙媒体はシュレッダーで裁断する。

研究計画の立案と研究活動の運営を筆頭著者である吉岡が担当し、データの検討・考察、論文の執筆・校閲等については、筆頭著者とともに著者全員が共同で行った。

3. 造形活動における子どもの思考過程

（1）先行研究の動向

本節では、造形活動における子どもの思考過程についての先行研究にはどのようなものがあるのかについて概観しておきたい。造形遊びの保育実践に基づく研究としては、「操作」が土台となって「イメージ」が後発的に生じたり子どもが思いを深めたりするという推移の構造について指摘した奥（2002）による報告があげられる。また槇・中澤（2003）は、幼児の表象化の過程において個人差が生まれるが、その個人差は「表現スタイル」として把握することができるとして表現活動における思考の過程を体系的に示している。さらに、造形遊びを対象として考察した例としては、丁子（2008）による社会的相互干渉の視点からの研究や、佐川（2013）によるモチーフに着目した造形表現の生成過程を扱った研究、そして子どもの造形表現過程の具体性を明らかにすることを試みた村田（2016）による研究がある。いずれも、子どもをとりまく環境や素材、そして身体での関わりや他者との関係の中で生まれる原初的な表現や行動の意味、子どもの思考過程等を解明しようとする試みであり本研究の問題意識に通底するものである。

一方で、子どもの＜集める活動＞に関する国内の研究に目を向けると、子どもが石を「集

める」「並べる」「積む」などの自然発生的な造形遊びについて論じた村松（2020）による研究がある。＜集める活動＞に関連する海外の研究者の動向に言及した例としては、Topal & Gandini による 1999 年の著書『魅力的な様々な事物 －こども達に発見された様々な材料を手掛かりに行われる学習－』を参照する形で「集めること」「発見すること」「組織すること」に着目した造形表現活動のコンセプトを紹介した鈴木（2021）による報告がある。また、造形活動における「集める」以外の子どもの操作や行為に着目した例としては、子どもの「並べる」「つなぐ」「積む」に関する技能の特徴、それに伴う認知や感情について論じた若山・米﨑・萩原・江田・桶本・上山・隅・鼓（2018）による研究や、「貼る」「切る」に着目した造形表現行為の変容について論じた上田・川喜田（2017）による研究が示唆的である。

そして、研究方法の側面からも先例について言及しておきたい。子どもの造形活動をめぐる思考過程についてのフローチャート作成を行っている研究としては、幼児が行う造形活動における見せる発話の際の思考過程をフローチャートによって可視化することを試みた事例（竹内・芦田、2016）がある。また、学習指導案等にフローチャートを導入するための方法論に関しても、比較的早期から報告されている（高野・竹本・石川・山下、1974）。本研究ではこれらの方法を援用し、特に子どもの＜集める活動＞の構造と思考過程を明らかにするとともに保育改善に向けた提案を試みたい。

（2）子どもの＜集める活動＞の構造および思考過程

本節では、1 名の子どもが自然素材に関わりながらひとり遊びを行う様子を収録した動画におけるエピソードから、子どもの＜集める活動＞の構造と思考過程を可視化するためのフローチャートの作成を試みる。子どもの記録動画の撮影とその分析に際しては、下記の条件において行った。

- ・対象児の年齢：　2 歳 8 ヶ月～ 2 歳 9 ヶ月（撮影は 1 名の子どもを対象として 2 ヶ月にわたり 2 回行った）。
- ・対象児の成育歴等：　0 歳から両親とともに生活しており、きょうだいはいない。撮影開始時において身長は約 88.6cm、体重は約 12.2kg。約 2 年 1 か月の保育歴がある。
- ・撮影を行う際の配慮：　子どもの活動や行動に関する具体的な働きかけは行なわないようにしたが、危険防止のための制止等は行った。
- ・フローチャート作成：　2 本の動画（合計 11 分 18 秒）から＜集める活動＞を含む エピソードの抽出を行い、それに基づいて 2 名の著者によりフローチャート化した。

このような手続きに沿って抽出した＜集める活動＞における 3 つの具体的なエピソード（ア～ウ）について、次頁に示す（子どもが選択する場面、または判断する場面があったと推測される箇所に下線を付した）。

ア．持ったものを手放したエピソード

（両手には集めたどんぐりが保持されている）

石を見つけて、両手に保持していたどんぐりを全て右手に移して握り、しゃがんだまま2歩にじり寄り、左手で石を持って右手に保持しようとする。一度、左手で保持した石を見て頭をかしげ、転がす。

イ．保持し続けた結果、活動の主題（豆まきごっこ）を生成したエピソード

（両手には集めたどんぐりが保持されている）

地面を見ながら立ち上がり、両手の中で保持しているどんぐりを転がしながら触り、3・4歩、歩いて撮影者を見る。撮影者の方へ3歩、歩いて左手で1個どんぐりを持ち、「おにはーそと」と発話しながら投げて手放す。地面を見てからまた左手で1個どんぐりを持ち「おにはーそと」と発話しながら投げて手放す。残り1個も右手から左手に移し持ち、「おにはーそと」と発話して地面を見たまま大きく腕をあげて降ろしてどんぐりを投げて手放す。2・3歩、歩いて木の根でつまずくと、靴に入れたどんぐりが気になりだす。気にしながら歩く。

ウ．活動の主題（お皿ちゃぽん）が先行していたエピソード

「お母さん、『お皿ちゃぽん』したいな。ねぇねぇ、お皿探して」と発話し母親と向かい合ってしゃがみながら川原の地面を見る。10cmほどの石を「これ」と発話して右手で持つ。両手で触り右手で保持する。また地面を見て4cmほどの石を左手で持ち、「これと」と発話しながら右手にある石に重ね保持する。続けて地面を見て「これと」と発話しながら3cmほどの石を左手で持って重ねて保持しようとする。左手で持ち直して「見といてね」と発話しながら立ち上がり川に向いて「ぽん」と発話しながら投げ入れて手放す。水に届く。

右手にある石を1個左手に持ち「ぽん」と発話しながら投げ入れるが、水に届かない。続けて残りの石も投げるが、水に届かない。届かなかった石に近づいてしゃがむ。左手で先に投げた石を触り、右手で次に届かなかった石を触りながら、左手で石を持ち投げ入れて手放す。今度は水に届く。右手の石も持ち「それ」と発話しながら投げ入れる。今度は水に届く。「お母さんもしてみて」と発話しながら立ち上がり、再び石を探し始める。

子どもの記録動画からは<集める活動>は「探す」ことから始まり、見つけた素材について持つか持たないかを選択したり、保持している素材について判断を行い次の動作に移行したりしていることがわかった。以下にエピソード（ア～ウ）における行動に基づいた思考過程の経路を示す。

ア．探す → 選択する → 持たない

イ．見る・触る・保持する → 判断する → 動作A（投げる）→ 手放す

ウ．持つ → 見る・触る・保持する → 判断する →

→ 動作A（投げる）→ 手放す → 動作A’（再び投げる）

記録動画を前頁のエピソード（ア～ウ）の範囲で整理し、子どもの＜集める活動＞の構造をフローチャートとして表示したものが、図 1 である。部分的な表示であるため、特に開始と終了は示していない。エピソード（ア～ウ）においては確認されなかったが、「判断する」の条件分岐の先には多様な動作に展開する可能性が考えられる。このフローチャートを作成することによって、＜集める活動＞は、「選択する」「判断する」といった条件分岐の場面と前後の動作によって構成されていることがわかった。

エピソード（イ）による「おにはーそと」という発話は、以前経験したことを重ね合わせて、どんぐりを節分の豆に見立てるという判断がなされていると推察される。エピソード（ウ）では、「川に向いて『ぽん』と発話しながら投げ入れて手放す」という行動の直前に、投げるという判断がなされたと考えられる。「動作 A（投げる）→ 手放す → 動作 A'（再び投げる）」といった一連の動作には、前述の投げるという判断が継続していたと推察される。そして同様の動作が繰り返されたことで、「石を水に届かせたい」という意欲がどのように生まれ、どのように展開したのかという思考過程を読み取ることができる。このように、保育者が子どもの興味関心が他へ移行する瞬間や子どもの思いを見て取れる僅かな動作に気づき、子どもの内面を見立てた上でその想像力に寄り添うことは重要である。

以上、子どもの発話や動作に注目してフローチャートを作成することにより、選択や判断などの条件分岐などが含まれる＜集める活動＞の構造を示すことができた。これまで 1 名の子どもによる事例をもとに議論してきたが、次の章では＜集める活動＞における思考や判断に着目し、自然素材を活用した保育指導について提案を行う。

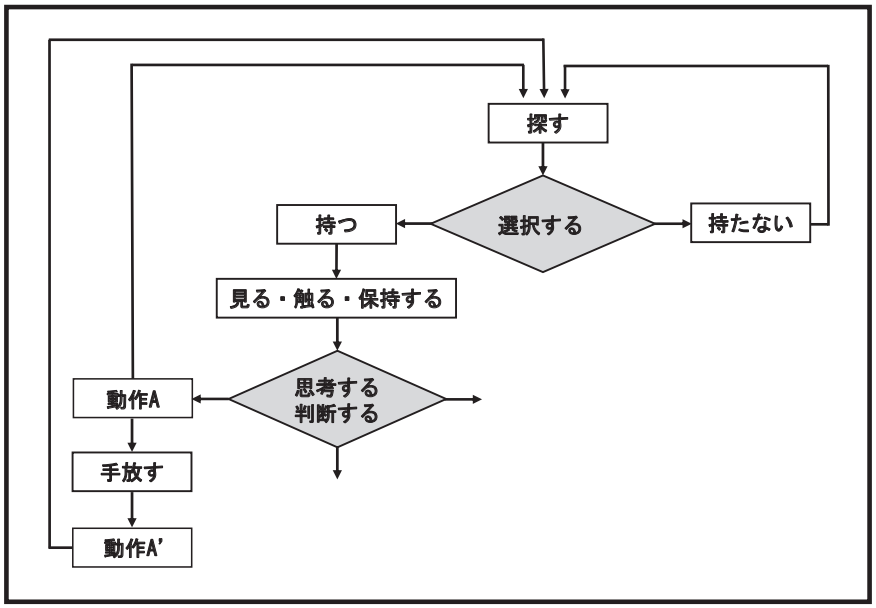


図 1 子どもの＜集める活動＞の構造と思考過程

4. ＜集める活動＞の構造および思考過程に基づいた造形表現活動の保育指導

(1) 自然環境の中で＜集める活動＞を保障する

本章では、これまでの考察を基に園庭における自然物との関わりの中で幼児の思いを生かした保育指導を目指した指導案のモデルを作成した(表1)。本保育指導案を作成するに当たっては、ある程度、花壇や畑などがあり雑草も生えている箇所のある園庭、または、各園で契約している空き地などでの活動を想定した。ここでは、園庭の中で行う自然物を＜集める活動＞を中心にした造形表現活動を目指しており、子どもの活動が自然物を用いて描いたり作ったりする行為に集約されることを念頭においている。また、2歳児でさえ＜集める活動＞が充実していたことが確認できたので、対象を5歳児とすることで、さらに活動の広がりが期待できると考えた。

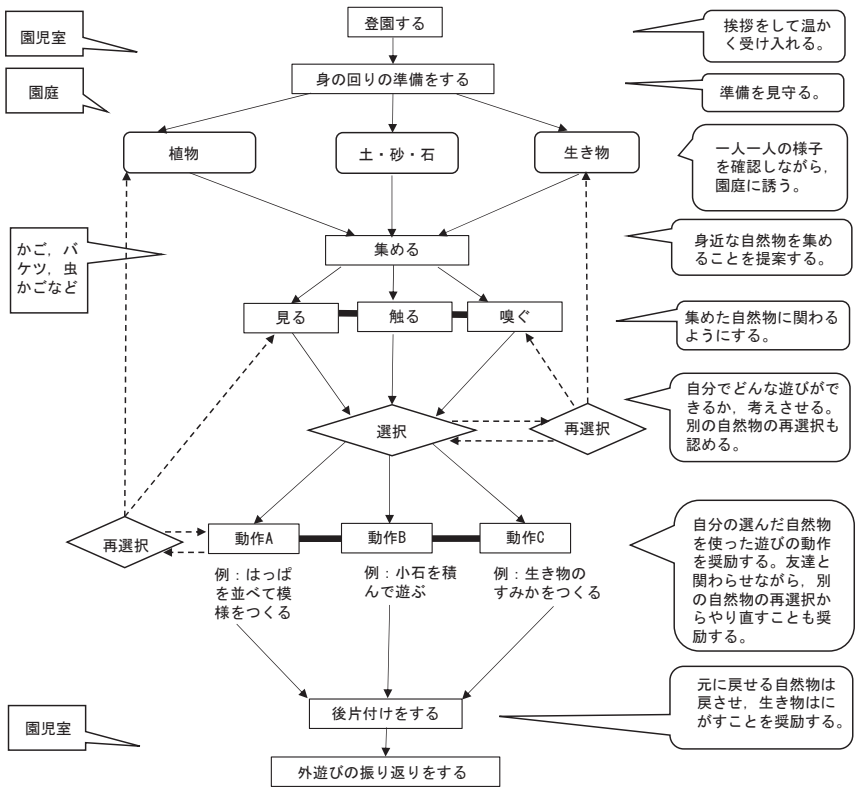
＜集める活動＞を支えるための環境設定として、自然物を集めるためのバケツ等の用具を加えた。また、「生き物」の範疇として昆虫であるバッタやアリ、蝶の幼虫などの他に、ダンゴムシも含まれるかも知れない。つまり、季節や地域によって子どもが集める生き物が異なるがそれらにどのように対応していくのかについても見届けることにしたい。活動場所としての園庭に自然を再現したビオトープを有している場合には、植物や生き物との関わりにより慎重にならざるを得ない場合も想定できるが、そのようなある意味環境が整いすぎている活動場所においても、可能な限り幼児の＜集める活動＞を中心に据えて、造形活動を広げるための選択や再選択を重視した流れを保障する必要がある。

(2) 再選択を位置付けた展開について

本保育指導案の特色として、児童の欄にあたる箇所に敢えてフローチャートを用いている。その理由として、前章までの分析によって、幼児の自然物の関わりを十分に観察した上で導き出された選択や再選択が分岐する起点を大切にしたいと考えたからである。そして、保育者によって画一的に順序立てられた流れにすることを避けるようにした。例えば、子どもが草花から色を取り出したいと考えることを想定して、保育者が環境設定として色水遊び用の透明なコップを事前に用意しておくことは問題がないが、それを用意したからといって、多くの子どもをその場に誘導するのではなく、小石に草花の色をこすりつけて出そうと思い付いた子どもの選択や再選択を保障しなければならないということである。最初から色水作りの他に小石にこすりつけるかも知れないという動作を想定することは難しいかも知れないが、たとえ、結果的に子どもの選択がそのようになっても、それを認めていく柔軟さが必要だということである。

したがって、一般的な保育指導案は、指導の思考の流れを想定した発話を中心に展開していくが、戻る、やり直すという行動を認めるために「再選択」というチャートを設けた。保育者が幼児の「再選択」を認める受容性を持ち合わせることで、幼児の多様な表現を認めることが可能になる。例えば、小石だけを集めて色ごとに分けながら並べていた子どもが、一旦活動を止めて、草花を集めに行って、小石と組み合わせながら並べ直し始めるかも知れな

表１　子どもの＜集める活動＞に着目した造形表現活動の保育指導案例

学級名	くま組（5 歳児、20 名）
題材名	集めたもので何する？
ねらい	＊身近な自然で、見付けた草花や昆虫などの生き物や土や砂などと豊かに関わることで、自分の思い付いた遊び（動作）ができるようにする。 ＊友達との関わりの中で、自然物に対する慈しみの気持ちを育てることができるようにする。
内容	自然物を集めて、その色や形を見たり、触ったり、匂いを嗅いだりして、自分のしたい遊びをする。
時間	2 時間
8：00 8：30 9：00 10：00 10：30	
	評価 ＊身近な自然物を集めることで思い付いた遊びを工夫することができたか。 ＊友達との関わりを通して、自然物に対する慈しみの気持ちを育てることができたか。

いし、小石とは別に草花だけを並べ始めるかも知れない。時に保育者が、子どもの気持ちを省みずに、小石の並べ方が美しいと受け止め、さらにその行為に固執するように指示を出したり、小石集めを手伝ったりといった過剰な支援は避けなければならない。

つまり、本保育指導案によって保育を行う際には、起点を元にした選択や再選択を保障するような保育者の関わりをより多く求めることになり、時には、環境設定もより多く必要になるが、保育者は、あくまでも安全な活動ができるように配慮しつつ、子どもの活動を見守る態度に徹することが求められるのである。

また、集めた後の「見る」「触る」のみならず、「嗅ぐ」という行為も入れることで、集めた自然物に関わる子どもの姿の多様性を認めるようにした。

いずれにしても、最終的には、子どものそれらの行為を通して思考力・判断力を働かせた新たな動作を認めて保育者が受け止めることができた上で、動作 A・B・C と広がりを期待したい。

5. まとめ

本研究の目的は、子どもの＜集める活動＞の構造および思考過程についての検討を行い、そこで得られた視点に基づいて造形表現活動の質的改善を図るための保育指導を提案することであった。第 2 章において得られた成果としては、1 名の子どもが自然素材に関わりながらひとり遊びを行う様子を収録した動画におけるエピソードを基にして個別の場面をフローチャート化したことである。そして「選択する」「判断する」といった条件分岐の場面と前後の動作によって構成されているという、子どもの＜集める活動＞の構造の一端を明らかにしたことがあげられる。これらの条件分岐に着目することを通して、第 3 章においては選択や再選択の後に行う様々な活動（動作 A・動作 B・動作 C）が個人内にとどまらず、子ども同士の関わりから活動が共同で行われたり、お互いに影響を与えながら活動が拡がったりすることを想定して、環境設定、保育者の支援など様々な要素が作用し合う保育の姿を示すことができる保育指導案を構想した。この保育指導案によって、子どもの＜集める活動＞が循環しながら発展するためには、「再選択」が活動の中で保証されることが重要であるという考察に至った。

ここまで、子どもの＜集める活動＞の構造と思考過程について提示することを試みたが本研究の限界としては、1 名の子どもによる複数の事例に基づいた検討にとどまるものであることがあげられる。子どもの＜集める活動＞の全体像を明らかにするためには、活動が行われる環境の相違によって構造にも違いが現れるのか、発達段階による違いはあるのか、などを検討することが必要である。このため、本研究で提示した保育指導案に基づいた保育実践を行い、複数の子どもの活動場面を設定したり、子ども自身が思いを確認し育もうとする場面を設定したりするなどして子どもの＜集める活動＞の質的分析を進めたいと考える。

文献

丁子かおる（2008）造形遊びにおける意味の理解：社会的相互交渉について . 日本美術教育研究論集、41、33-42

槇英子・中澤潤（2003）幼児の表現活動に見られる個人差の意味：「表現スタイル」を想定した支援のために . 千葉大学教育学部研究紀要、51、181-191

村松和彦（2020）子供の無意図、もしくは神：賽の河原の石積みは造形遊びか . 作大論集、10、33-42

村田透（2016）「造形遊び」の題材における幼児の造形表現過程に関する研究 . 美術教育学、37、415-428

奥美佐子（2002）造形活動の初期的行為としての探索活動：造形遊びと比較検討する . 名古屋柳城短期大学研究紀要、24、75-87

佐川早季子（2013）幼児の共同的造形遊びにおけるモチーフの生成過程の分析：幼児の注視方向に着目して . 保育学研究、51（2）、163-175

鈴木幹雄（2021）アメリカ教育学者 C・W・トッパルにみる現代ヨーロッパ幼児教育学受容についての一考察 . 関西福祉大学研究紀要、24、111-119

高野信行・竹本篤郎・石川隆三郎・山下昇（1974）学習指導案におけるフローチャート作成に関する一試案 . 日本教育学会大會研究発表要項、33、160-162

竹内晋平・芦田風馬（2016）粘土の造形活動における幼児の見せる発話Ⅱ：その発生機序に関する検討を中心に . 次世代教員養成センター研究紀要、2、67-75

上田敏丈・川喜田奈保（2017）幼児の造形表現行為の変容過程に関する実践的研究：3 歳児の「貼る」「切る」に着目して . 人間文化研究、28、155-169

吉岡千尋・川口奈々子・隅敦・竹内晋平（2022）自然素材をめぐる子どもの＜造形的行動＞を対象とした質的検討：領域『表現』に関する専門的事項のコード化による子ども理解を意図して . 基礎造形、30、35-42

若山育代・米﨑瑛美・萩原至道・江田希・桶本佳江・上山輝・隅敦・鼓みどり（2019）幼稚園・小学校・中学校の接続期における学びとしての「並べる」「つなぐ」「積む」技能：教師による異なる学校種の子ども理解 . 富山大学人間発達科学部紀要、13（2）、235-245

（受付日 : 2023. 11. 10）